

インプラントより義歯で治す31提言

部分床義歯の設計と咬合

インプラントバッシングが続く日本では、このところインプラントについての解説書が減少し、矯正と義歯の解説書が増えている。しかし、本書はその種の一過性のブームに乗ったものではない。かねてから咬合、義歯の著書を発表してきた著者が、補綴臨床医の間で話題を集めた前著『全部床義歯の痛み』の姉妹編として執筆したパーシャルデンチャー設計の指南書だ。

単なる技術書ではなく、「部分床義歯の何が難しいのか」という、補綴臨床で実際に直面する諸問題の背景を解説している。また、所定の原理原則に基づいていけば、審美性、経済的限界などの要因があったとしても、咬合

の問題を回避しつつ設計を変更できることを示している。

本書で示されている原則は、義歯の動揺を少なくすること、残存歯や支台歯の圧下を防止すること、咀嚼側と非咀嚼側を分けることの3つ。この原則に従って部分床義歯を設計する際に発生し得る31の困難事例を示し、その事象が起こる理由と対処法を、写真、図版を用いて分かりやすく解説している。部分床義歯で補綴すべき症例とブリッジで対処する症例を分け、その理由も明示。

エピローグで、義歯はその長期的維持の困難さゆえに人工臓器としての要件を満たしていないが、いつの日か、インプラントに代わる新たな補綴法として再び注目される時代が来るだろうと結んでいる。

(アポロニア21 7月号書評より)